

杜詩「対偶素」の提唱

2023年9月2日(土曜日) 北海道教育大学旭川校

14:00～14:40

発表者；水谷 誠 司会；松原 朗

杜甫詩に関する構造主義的なアプローチ

(これに関して、ひとつこと)

- ▶ 「構造主義は」文学をつまらなくする.....前任校で文学批評を専門としていた同僚のことば。
- ▶ 武部利男氏の「叙情の構造」に対する反発。(『中国古典詩学への道』松浦友久著作選Ⅳ所収論争)

「対偶素」自体を述べる 前に、なぜそうした事を 思いついたのか。

▼それは、以前本学会で、提唱した「**韻字** **ユ** **ニツト**」が発端である。――唐代の近体詩での韻字には特定の文字に集中して用いられる傾向がある。このため、韻字一字を調査しても詩人ごとの特色を見ることは難しい。むしろ、韻字の上二字を工夫すること、を強いられていたのではないかと考え、韻字とその上二字をまとめて「**韻字ユニツト**」を提唱した。

▼これについては、ほとんど反響がなかった。

▼そこで、さらに範囲を広げてみてみることにした。近体律詩は頷聯・頸聯に対偶を必須とする。このことから、この聯での「**韻字**」に偏りがあるならば、非韻字句の上句末に影響を与えているのではないかと考えた。

▼結果は、上句末字に特定の文字が集まる傾向が確認できた。（「白居易律詩対偶論」『中国詩文論叢』四〇 二〇二一年十二月）

対偶も二字ごとにまとめて考察できるのでは？

▼ 唐代詩人たちが、韻字を三字まとめて活用していたのなら、対偶も二字ごとにまとめて使っていたのではないかと考えた。

▼ そこで、五言律詩の場合、一句が

○○・○○○

に切れる。また、七言律詩では、一句が

○○・○○・○○○

に切れる。五言でも七言でも上の部分は、二字ごとにまとまる。これは二字ごとの熟語との相性が良い。これをまとまりとして調べるとどうなるか？

▼ 白居易の律詩について、調べてみると、重複使用が多い。さらには対のペアも使い回しが多いことがわかった。（「白居易律詩対偶での再利用について」『中国詩文論叢』

四一 二〇二二年一二月）

杜甫の対偶はどうなのか、調べる必要がある。

▼ 最初は、杜甫近体詩（律詩・絶句・排律）の対偶上部のみを調べてみた。これだけでも、一千例を超す二回以上の用例を得ることができた。

▼ しかし、対偶は上半分だけでなく、下半分（三字部分）にもある。これをどう考えるか？そこで、機械的に二字のまとまりを考える。つまり、

○○× あるいは ×○○

として、一字を切り捨てる。そうして、この二字まとまりの対偶を「**対偶素**」と呼ぶことにする。

▼ ただし、杜甫の場合、古体詩にも対偶がおい。また、そこで用いられる対偶素も近体との出入りがある。そのため、古体詩の対偶も調べた。（これがとても難しかった）結果として約三千三百の対偶素を得ることができ、これをデータベース化した。（今回はエクセルファイルにしてある）

データベースの凡例

ID 対偶素読み 対偶素 整理番号 杜甫作品番号 詩型 位置 対応対偶素 対応単複

5009 Qi Shi	七十	1189	0174	五排	U9下	三千	復(1188)	使
5010 Qi Shi	七十	1189	0346	五排	H9上	三千	復(1188)	使
5011 Qi Shi	七十	1189	0208	七律	B2下	尋常	復(2281)	

8210 Xun Chang	尋常	2281	0208	七律	B2上	七十	復(1189)	
8211 Xun Chang	尋常	2281	1332	五排	V9上	忌諱	単	
8212 Xun Chang	尋常	2281	1440	七絶	A3上	幾度	単	

「ID」は、データ入力順(これは無視して良い)

「対偶素読み」は、ピンインで表示してある。多読音の場合一致しないことがあるかもしれない。

「対偶素」＝見出し字。「整理番号」は、当方の区別のための番号で無視して良い。

「杜甫作品番号」は、『杜甫全詩訳注』の作品番号。「詩型」古体の場合、雑言古詩の項目を立てている。

「位置」は、アルファベット・カナで各聯の位置を示す。次に句での位置を示す。**5**は五言句の上、**9**は五言句の下、**1**は七言句の一番目、**2**は七言句の二番目、**3**は七言句の三番目。最後の「**上**」は、上句。「**下**」は下句。「対応対偶素」は対となる対偶素。「単複」は、対応する対偶素が複数有るか、単独かを示す。(最後の「使」は、同じペアがあることを示す)

▶ 「乾坤」をしてみる。

564 Qian Kun	乾坤	0137	0096	五排	I5下	日月	復(0054)	使
565 Qian Kun	乾坤	0137	0576	五律	C5下	弟妹	復(1345)	
566 Qian Kun	乾坤	0137	0606	五律	A5下	幽薊	単	
567 Qian Kun	乾坤	0137	0721	五律	C5下	宮闕	復(0726)	
568 Qian Kun	乾坤	0137	0802	五律	A5下	朝野	復(2994)	
569 Qian Kun	乾坤	0137	0808	五律	B5上	時序	復(2891)	
570 Qian Kun	乾坤	0137	0960	五排	H5下	寇盜	復(0656)	使
571 Qian Kun	乾坤	0137	1086	五律	B5下	身世	復(0930)	
572 Qian Kun	乾坤	0137	1101	七絶	B2上	江漢	復(0616)	使
573 Qian Kun	乾坤	0137	1305	五排	P5上	雨露	復(1099)	使
574 Qian Kun	乾坤	0137	1359	五律	C5下	日月	復(0054)	使
575 Qian Kun	乾坤	0137	1363	五律	B5下	吳楚	復(3202)	
576 Qian Kun	乾坤	0137	1419	五律	A5下	江漢	復(0616)	使
714 Qian Kun	乾坤	0137	0033	五排	G9上	道術	復(1062)	
715 Qian Kun	乾坤	0137	0173	五律	B9上	日月	復(0054)	使
716 Qian Kun	乾坤	0137	0346	五排	C9上	雨露	復(1099)	使
921 Qian Kun	乾坤	0137	0667	五排	E9上	府庫	単	
973 Qian Kun	乾坤	0137	0223	五古	H5上	粉墨	単	
974 Qian Kun	乾坤	0137	1049	五排	E9下	竹帛	単	
975 Qian Kun	乾坤	0137	1060	五古	C5下	胡虜	復(0717)	
979 Qian Kun	乾坤	0137	1386	五律	A9上	郡國	復(1256)	
980 Qian Kun	乾坤	0137	1429	七古	H3下	寇盜	復(0656)	使
5293 Qian Kun	乾坤	0137	0423	五古	A9下	蘇息	復(2691)	
7536 Qian Kun	乾坤	0137	0970	五律	D9下	戰伐	復(1126)	
7910 Qian Kun	乾坤	0137	1222	五律	D9下	消息	復(0695)	
7981 Qian Kun	乾坤	0137	1263	五古	A9上	風俗	復(0171)	
7998 Qian Kun	乾坤	0137	1267	五古	G9下	諫諍	復(2040)	
8223 Qian Kun	乾坤	0137	1413	五古	C5上	揚馬	単	

丸井論文に指摘する双声語由来の対偶語もあれば、別の要素の対偶語もある。たとえば、「日月」と相性が良い。ただし、「日夜」はない。

対偶素多用例

- (38) 0097萬里
- (28) 0824白帝・0137乾坤
- (27) 0116風塵
- (24) 0761巫峽
- (21) 0253朝廷・0432何處
- (20) 0043江湖・0542干戈
- (19) 0144今日・0080白頭
- (18) 0085文章・0147故人・0437白日・0215天地・0111白髮・0616江漢・0119落日・0239蛟龍

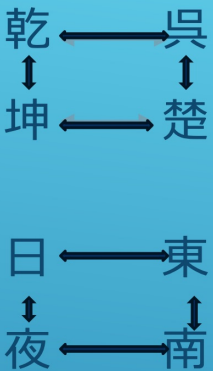
「文章」をしてみる

293	Wen Zhang	文章	0085	0066	五排	E5下	侯伯	単	
294	Wen Zhang	文章	0085	0205	五律	A5下	冠冕	復(2521)	
295	Wen Zhang	文章	0085	0305	五律	C5上	魑魅	単	
296	Wen Zhang	文章	0085	0344	五排	D5上	遷擢	単	
297	Wen Zhang	文章	0085	0398	七律	B2上	車馬	復(0464)	
298	Wen Zhang	文章	0085	0543	七絶	A2上	健筆	復(0157)	
299	Wen Zhang	文章	0085	0795	五排	C5下	豪俊	復(2910)	
300	Wen Zhang	文章	0085	1155	五排	m5下	鄭李	単	
301	Wen Zhang	文章	0085	1305	五排	a5下	丘壑	単	
634	Wen Zhang	文章	0085	0245	七古	B3下	骨肉	復(1622)	
635	Wen Zhang	文章	0085	0836	五律	C9上	老病	復(1012)	
636	Wen Zhang	文章	0085	0924	五排	I9上	禮樂	単	
637	Wen Zhang	文章	0085	0949	五古	K5上	掾吏	単	
638	Wen Zhang	文章	0085	0951	五古	P9下	君子	復(1875)	
641	Wen Zhang	文章	0085	1267	五古	H9上	經術	復(0047)	使
642	Wen Zhang	文章	0085	1289	五排	D9下	經術	復(0047)	使
643	Wen Zhang	文章	0085	1315	五律	A9上	意緒	単	
644	Wen Zhang	文章	0085	1429	七古	K1上	服食	復(3273)	

対となる対偶素から、杜甫の文学観を考えるヒントになるかもしれない。

今回の対偶素データの限界。

▼たとえば、句中対などの考察が漏れてしまう。例を挙げれば、



のように対偶素内の分子が対構造をなすことがある。こうしたものをすくい上げることができていない。

▼また、句中対は、散句内でも見られる。こうしたものを含めて、今回、句中対のデータ化は放棄した。(その残骸が表に見える)

▼さらには、杜甫は聯ごとの対(一見すると上句と下句の関係は散句になる)を古体詩で試みている。これをすくい上げるには別の基準が必要であろう。

▼また、このデータベースのみでは、対となるまわりも見えてこない。そこで・・・

『杜詩詳注』対偶譜

【1040_閣夜】（七律）

歲暮 陰陽 催短景、天涯 霜雪 霽寒宵。
五更 鼓角 聲悲壯、三峽 星河 影動搖。
野哭 千家 聞戰伐、夷歌 幾處 起漁樵。
臥龍 躍馬 終黃土、人事 音書 漫寂寥。

「対偶素」を出てくる回数ごとに色分けをした。

1回目は深緑。2回目は浅緑。3回目は茶色。4回目は桃色。5回～9回は赤。
10回以上は、青。

なお、二回以上ペアとなって出てくるものは、白抜き文字に点線で囲ってある。

「秋興」での例を見てみる

「秋興」の其の一から四までを見てみると其の二の尾聯が対偶になる以外は、どれも頷聯・頸聯が対偶になっている。

その部分を調べてみると、

其の一 初出4ヶ所、既出8ヶ所。

其の二 初出8ヶ所、既出4ヶ所。

其の三 初出4ヶ所、既出8ヶ所。

其の四 初出5ヶ所、既出7ヶ所。

以上のように過去に使った対偶素が多く用いられている。そのうち二回目
が14例であることで、既出感はそれほどないと思われる。

『秋興八首』

0985其一(七律)

玉露凋傷 楓樹林、 巫山 巫峽 氣蕭森。
江間 波浪 兼天湧、 塞上 風雲 接地陰。
叢菊 兩開 他日淚、 孤舟 一繫 故園心。
寒衣 處處 催刀尺、 白帝 城高 急暮砧。

0986其二(七律)

夔府 孤城 落日斜、 每依 北斗 望京華。
聽猿 實下 三聲淚、 奉使 虛隨 八月槎。
畫省 香爐 違伏枕、 山樓 粉堞 隱悲笳。
請看 石上 藤蘿月、 已映 洲前 蘆荻花。

0987其三(七律)

千家 山郭 靜朝暉、 日日 江樓 坐翠微。
信宿 漁人 還汎汎、 清秋 燕子 故飛飛。
匡衡 抗疏 功名薄、 劉向 傳經 心事違。
同學 少年 多不賤、 五陵 衣馬 自輕肥。

0988其四(七律)

聞道 長安 似弈棋、 百年 世事 不勝悲。
王侯 第宅 皆新主、 文武 衣冠 異昔時。
直北 關山 金鼓震、 征西 車馬 羽書馳。
魚龍 寂寞 秋江冷、 故國 平居 有所思。

さらに後期の「登高」では

『1213_登高』（七律）

風急 天高 猿嘯哀、渚清 沙白 鳥飛迴。
無邊 落木 蕭蕭下、不盡 長江 滾滾來。
萬里 悲秋 常作客、百年 多病 獨登臺。
艱難 苦恨 繁霜鬢、潦倒 新停 濁酒杯。

本詩は全対の作品であって、24ヶ所のうち、初出は9ヶ所。二回目出現が3ヶ所。三回目出現が4ヶ所。四回目3ヶ所。十回以上の出現が5ヶ所。上句二番目は、四回目がそろえられている。こういうことは杜甫はしばしばする。また、「萬里」と「百年」のペアも既出である。このように再利用の工夫で本詩は作られている。

- ▶ 杜甫の対偶は基本的には、初出が主流である。しかし、次第に過去のものをより磨くように何度も同じ対偶素を使うようになる。その際に、これをカード化ように思われる。同じ頻度のものをそろえたり、上の句は既出、下の句は初出というようなこともしている。いかに記憶力が抜群でも、カードのようなもので自由に並べ替えることをして、表現力の向上を絶えずしていたように状況的に推察される。つまり、意図して過去の対偶素を磨くことを心がけていることは見て取れる。

本対偶譜を通覧すると、深緑から赤系に色を変えることで、杜甫の対偶素の使い方に変化が見られる。

こうした興ざめな作詩態度と作品自体とは分けて考えるべきだろう。

- ▶ 近代詩人の北原白秋は、『大言海』を任意に広げて、そこにあった語彙をヒントに詩を作っていた。彼は、『大言海』を持てなくなった時に詩を作れなくなったと嘆いた。(今野真二『北原白秋』岩波新書)
- ▶ 杜甫は、晩年船の中でカードを並べて、詩を作っていた。仮に突然船の扉を開けたら、杜甫から「カードが飛ぶ！開けるな」と怒鳴られただろう。おそらくそのカードは一万枚以上あっただろう。それがどのように整理されていたのか、それ自体関心がある。最晩年、家族がそのカードを読み上げたりして、作詩を助けたのだろう。そうでなければ病に伏せって、あれほどの長詩を書くのは困難である。それらは、散句での部分でも役立ったろう。筆写も家人が書いたであろう。晩年の表現を対偶素を通して考えることも必要でしょう。

ご静聴ありがとうございました。

ちなみに、本データベースや対偶譜を自由にご使用ください。これによって学術が発展すれば、心よりうれしく思います。「中国詩文研ホームページ」よりダウンロードしてください。また、自由に改編してもかまいません。使いやすいように利用してください。